

古墳時代のまつり

—住居出土の石製模造品をめぐる—

黒 沢 崇

1. はじめに

古墳時代中期から後期の集落を発掘していると必ずといってよいほど石製模造品が出土する。それほど一般的なものであるにもかかわらず、出土状況が明確にされているものは多くない。その原因としては、1軒の住居から出土する数が少なく、大きくても10cmにも満たないためである。しかし、それでは遺物から導き出される製作技法や流通を想定することはできるが、その遺物を用いた行為を復元していくのは困難である。発掘現場で詳細に観察し、丁寧に掘り進めていかなければ結局は、「まつり」という曖昧な決まり文句で全てを済ませてしまっ、歴史を物から語るということも中身の無いものになってしまいかねない。そこで本論では、古墳時代中期から後期の住居から出土した石製模造品に焦点を絞り、出土状況を検討することにした。そして、いわゆる遺物論に終わることなく、遺物の背後にある人間の行為にいくらかなりとも近づけるよう分析を試みたい。

2 研究略史

石製模造品の研究はおおまかに3期に分けることができる。

第1期 (1897年～)

石製模造品の研究の先鞭をつけたのは、1897年下村三四吉氏の「模造副葬品に就きて」である⁽¹⁾。その中で下村氏は、古墳の副葬品を実用品と模造品とに分けている。そして、石製模造品を「実用品をそのまま埋納するにあらずして、葬儀品として製造せられたるもの」と規定している。この際、「石製模造品」という言葉を使用しているが、用語として明確に意識してはいないようである。1899年には、大野延太郎氏が「石製模造品に就て」で仮にはあるが「実用品ならざる種類の石製物を石製模造品」と命名している⁽²⁾。用途は儀式的に用いたものとしている。1902年には、八木柴三郎氏が「古墳時代の模造品について」において、これまでの研究が古墳出土の石製模造品ばかり取り上げて

きたことに対し、古墳以外からも出土していることを指摘している⁽³⁾。1919年には、高橋健自氏が『古墳発見石製模造器具の研究』において古墳出土の石製模造品を分類し、総合的な研究を行っている⁽⁴⁾。

第2期 (戦後～)

戦後になり発掘による石製模造品の出土例が増加したことにより、各方面に研究内容が分化してきた時期を第2期としたい。まず、亀井正道・梶山林継両氏をはじめとする、石製模造品と古墳や祭祀遺跡との関連研究がある⁽⁵⁾。他方面では、寺村光晴氏をはじめとして製作遺跡出土遺物の詳細な観察による研究があり、古墳時代の政治的な問題にまで言及している⁽⁶⁾。もう一つの方向として白石太一郎氏をはじめとする古墳編年に関わる研究がある⁽⁷⁾。

こういった方面の研究が主流である中、1971年に高橋一夫氏が住居出土にスポットをあて、さまざまな視点から分析を行っている⁽⁸⁾。その中で石製模造品は限られた住居から出土し、その住居は、共通した性格をもつものであると考えている。そして、石製模造品を用いた祭祀の対象を農耕祭祀としている。1986年には、寺沢知子氏が「祭祀の変化と民衆」において、石製模造品を用いた民衆の祭祀を想定し、その祭祀は、古墳での祭祀との関連性が乏しいと述べている⁽⁹⁾。

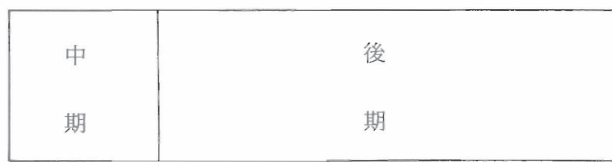
第3期 (現在)

第3期は、近年の開発に伴う発掘により、爆発的に石製模造品の出土例が増加し続ける中、第2期で各方向に向かった研究を相互に関連づけて、集約していこうとする段階である。この体系化の研究の基礎研究として出土例の全国的な集成⁽¹⁰⁾や篠原裕一氏の一連の研究⁽¹¹⁾が挙げられる。

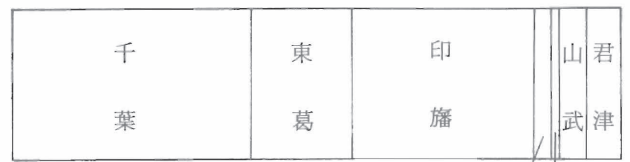
3 住居出土の事例の分析

千葉県での出土状況

『研究紀要』13において、本県の玉作の遺跡の集成が行われている⁽¹²⁾。基礎資料をこの文献にもとめ作成したものが、図1のグラフである。石製模造品を出土

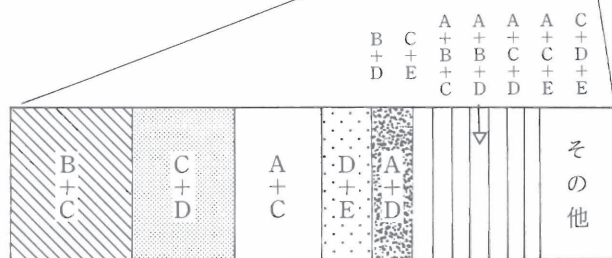
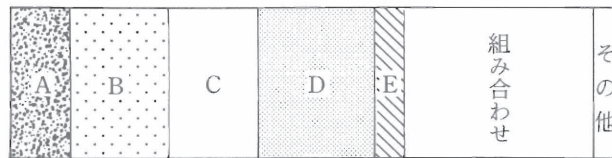


①時期別

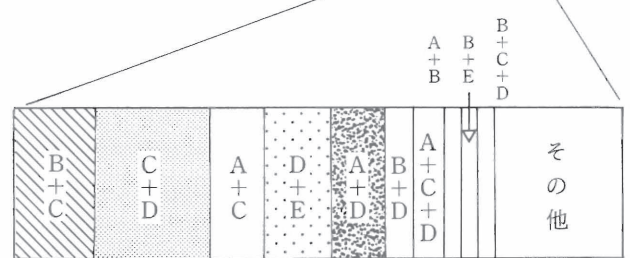


②地域別

香海
取匠



③中期



④後期

- A. 勾玉形 D. 白玉
- B. 剣形 E. 管玉
- C. 有孔円板

図1 住居出土石製模造品組成比



- 1. 柏市尾井戸遺跡
- 2. 柏市鴻ノ巣遺跡
- 3. 佐倉市岩富漆谷津遺跡
- 4. 千葉市大森第1遺跡
- 5. 千葉市馬ノ口遺跡

図2 遺跡位置図

する住居で、未成品を含まないものを抽出した。

古墳時代中期から後期の遺跡で石製模造品を出土した住居は、中期で104軒、後期で335軒の計439軒である(図1-①)。後期で3倍に増えており、石製模造品を用いたまつりの浸透の様子をうかがうことができる。地域別にみると、千葉・東葛飾・印旛地区で全体の87%を占めている。これは、発掘調査の寡多による現象であることが考えられ、一概には判断のできないところである(図1-②)。グラフに数値の表れていない長生・夷隅・安房地区は、住居からの明確な出土はみられないが、グリッドや表採による出土は確認されている。現段階では、出土の地域差を強調するよりも石製模造品という特殊遺物が全国的に出土しているというところの方を重視したい。

石製模造品を出土した中期の住居104軒の内、単一品目のみの出土は、64%の67軒である。その内訳は、勾玉形が10%の10軒、剣形が16%の17軒、有孔円板が15%の16軒、白玉が19%の20軒、管玉が4%の4軒である。管玉を除き、ほぼ平均的に出土しているといえる。何品目かを組み合わせての出土は、34%の35軒である。組み合わせの内訳は、多い方から述べると剣形と有孔円板が20%の7軒、有孔円板と白玉が17%の6軒、勾玉形と有孔円板が14%の5軒、白玉と管玉が8%の3軒、勾玉形と白玉が6%の2軒、その他組み合わせが各1軒ずつである(図2-③)。3品目以上を組み合わせて出土している例が予想以上に少ないことが分かる。石製模造品には、何品目も種類が存在するのにもかかわらず、1または2品目のみの出土例が大多数を占めている点に注目したい。

次に、後期の住居335軒の内、単一品目のみの出土は、69%の232軒である。その内訳は、勾玉形が10%の33軒、剣形が9%の29軒、有孔円板が17%の59軒、白玉が26%の89軒、管玉が7%の22軒である。後期でも管玉出土住居の占める割合が少ないことが分かる。そして、有孔円板と白玉の出土が目立っている。何品目かを組み合わせての出土は、17%の56軒である。組み合わせの内訳は、剣形と有孔円板が14%の8軒、有孔円板と白玉が19%の11軒、勾玉形と有孔円板が9%の5軒、白玉と管玉が11%の6軒、勾玉形と白玉が9%の5軒、その他組み合わせが各1～3軒ずつである(図1-④)。

基本的に中期の組み合わせの内訳と、あまり変わらないことが分かる。また、後期の全体の出土軒数が中期に比べかなり多いにもかかわらず組み合わせで出土

した軒数は後期56軒と中期35軒で大差がないことが判明した。

次は、石製模造品の出土状況を比較的良好に把握することができ、かつ、広面積の発掘が行われた遺跡を個別的に抽出し、分析してみたい。

柏市尾井戸遺跡⁽¹³⁾

この遺跡は、宅地造成事業に伴って1977年に発掘調査が行われた、古墳時代中期から後期の集落跡である。利根川の湿地草原地に向かって北東に突き出ている舌状台地上に立地する。1号住居から剣形石製模造品が北壁中央の床面直上で出土している。石製模造品が1点のみの出土に関わらず、土師器は、豊富に出土している。特に、完形の高坏が貯蔵穴付近から9点出土している点は、注意すべきであろう。周溝・柱穴はなく、貯蔵穴・炉を有する。炭化物・焼土の出土から焼失住居と考えられる。集落の中心は、台地の付け根であるが、1号住居のみ舌状台地の先端に位置する。

柏市鴻ノ巣遺跡⁽¹⁴⁾

この遺跡は、宅地開発事業に伴って1973年に発掘調査が行われた、縄文時代から平安時代にかけての集落跡である。手賀沼支谷をのぞむ標高約17mの台地上に立地する。C地区の古墳時代中期の住居2軒から石製模造品が出土している。4号住居からは、1点の有孔円板が西側2柱穴の間の床面直上で出土している。この住居には、炉が2か所存在し、その1つが有孔円板近くに位置している。6号住居からも有孔円板が1点出土しているが出土位置・レベルは、記載されていない。覆土中、床面から多量の焼土・炭化物が検出されていることから焼失住居と考えられる。

佐倉市岩富漆谷津遺跡⁽¹⁵⁾

この遺跡は、小学校移転改築に伴って1980年から1981年にかけて発掘調査が行われた、古墳時代から平安時代の集落跡である。鹿島川の支流である弥富川に面する微高地に立地する。石製模造品を出土した住居は、古墳時代中期の住居11軒、古墳時代後期の住居36軒である。焼失住居と考えられるものが多いが、この時期の集落全体の傾向であるといえる。考察編で玉類の出土状況の分析が行われているが、全て廃棄という前提のもとに検討がなされている。しかし、全てを廃棄であると考えするには明確な根拠の提示が必要であろう。

焼失住居である古墳時代中期の2軒から石製模造品が集中して出土している。100号住居は、この時期の住居では最大規模で、集落の北端に位置する。石製模造

品では、勾玉形1、剣形3、有孔円板4、板状未成品1、石屑2点が出土している。他の遺物で重要なものとして床直で筋砥石が出土し、鉄製刀子、高坏も出土している。

93号住居からは、勾玉1、剣形4、有孔円板11、白玉161、石屑7点が出土している。その内剣形1、有孔円板3、白玉5点が床面からやや浮きながら壁面に突き刺さって出土している。その他の遺物では、高坏の出土が多い。どちらの住居とも石屑、高坏が壁際、貯蔵穴付近から出土し、住居規模も他住居に比べ大きい点の特徴である。

千葉県大森第1遺跡⁽¹⁶⁾

この遺跡は、道路建設に伴って1972年に発掘調査が行われた、古墳時代前期から平安時代にかけての集落跡である。樹枝上の侵食谷が入り込んだ標高28mの舌状台地上に立地し、台地の縁辺部には、小貝塚も形成されている。石製模造品を出土した住居は8軒である。ほとんどの住居がカマドを有している。その中でも25号住居は、炉を有し、剣形2、有孔円板5、白玉72、管玉2点を出土している。レベルの記載はないが、白玉の出土範囲は散在せずグループをもって各支柱穴の周辺に分布している。また、貯蔵穴から滑石質の剝片が2点出土している。他の遺物では、赤彩された高坏や杯が出土している。

千葉市馬ノ口遺跡⁽¹⁷⁾

この遺跡は、宅地造成に伴って1980年から1981年にかけて発掘調査が行われた、古墳時代前期を中心とする集落跡である。鎌取駅南方の標高42mの台地上に立地する。古墳時代中期の63号住居から石製模造品が極めて良好な状態で集中して出土した。この住居は集落の中心から離れた西端に位置している。炉と貯蔵穴を有し、覆土は、レンズ状の自然堆積を呈している。出土した石製模造品の内訳は、剣形4、有孔円板4、白玉未成品1、研磨のみられる石片4点である。それぞれが、重なるように南西壁際の床面やや上から確認された。孔のあいていない未成品と石片が一番上に接しているため、吊り下げていたものが落ちてまとまった状態でないことは確かである。つまり、まつりの状態を直接表してはいないと判断できる。他の遺物では南東コーナーの貯蔵穴付近から埴、小型甕、高坏、大型壺が床直で出土している。

群馬県渋川市中筋遺跡（2次）⁽¹⁸⁾

この遺跡は、1987年から1988年にかけて発掘調査が行われた古墳時代中期の集落跡である。遺跡全体が榛

名山の火山灰（Hr-S）の降下によって覆われ、当時の集落の様相を知るのに良好な資料を提供してくれる。

2つの規模の石製模造品を出土した祭祀跡が確認されている。1号祭祀跡は他の地表より僅かに盛り上がった上屋構造のない東西7.7m、南北4.6mの不正楕円形を呈した遺構である。そこには、石と完形の土器が多く配置され、イノシシの歯や焼土跡も確認されている。白玉は坏の中と配石内の土の中から16点出土している。破損した剣形も1点出土している。2号祭祀跡は、竪穴住居と平地住居を取り囲む垣根内に位置する。規模は、東西2.5m、南北1.8mである。石と坏が配置されている。植物の繊維質が残る炭化物和イノシシの歯、そして白玉が3点出土している。

報告者は、1号祭祀跡を集落全体の祭祀場とし、2号祭祀跡を1単位集団の祭祀場として把握している。

4 出土状況の分類及び集落におけるあり方

千葉県全体の出土状況と主な遺跡の検討によりおぼろげながら石製模造品の出土状況のパターンを見いだすことができたので以下に示してまとめとしたい。

まず、石製模造品が、古墳時代中期から後期の集落で全県的に分布していることから、石製模造品を用いたまつりは、かなり浸透していたものであったと考えられる。その石製模造品が集落ごと、遺構ごとに違う意識のもと扱われていたとは考えられない。時期別での組成でも表れているとおり、時期が推移してもほとんど変化はみられない。出土状況によって都合のいいように石製模造品の解釈が行われている現状を脱却するために、ここでは、基本的に石製模造品を用いたまつりというものは1系統であるという前提のもと考察を行っていきたい。

石製模造品の出土状況の分類を行うには、遺物の出土数・出土位置・出土レベル・伴出遺物・遺構の集落内での位置などの要素が考えられる。しかし、その要素は、ほとんど発掘を行った時点での結果を表しているに過ぎない。したがって、石製模造品を用いたまつりの実態を明らかにするためには、石製模造品がその場に出土した経緯をおさえなければならない。

まず、石製模造品を出土した住居が不慮廃屋であったのか、自然廃屋であったのかの分析が必要である⁽¹⁹⁾。その次に、遺物の出土状況の分析を行う。分類は、桐生直彦氏の一連の研究⁽²⁰⁾を参考にした。石製模造品については、遺棄・廃棄・流入⁽²¹⁾を想定することができる。以上のことをまとめたものが図3である。

遺構	遺物	まつりの復元	分類
不慮廃屋	遺棄	◎	(1)
	廃棄	△	(2)
	流入	×	(3)
自然廃屋	遺棄	○	(4)
	廃棄	△	(5)
	流入	×	(6)

図3 石製模造品の出土状況の分類

6パターンに分類が可能である。この分類に基づき上に挙げた要素を加味して、それぞれの説明を遺跡の出土例に照らし合わせながら行いたい。

石製模造品を用いたまつりを復元するのに一番の良好な資料は、(1)である。住居でこの項目に認定できるものがないため、中筋遺跡を参考にした。この遺跡では、前に紹介したように2つの規模で石製模造品を用いたまつりが行われている。石製模造品のみを用いただけでなく、土器類、配石、火、動物などを用いたまつりの具体像が浮かびあがっている。

この遺跡で注目したいのは、上屋構造のない遺構の存在と、住居の垣根内に位置するという点である。これらの存在は、普通我々が発掘しても確認することは、困難であり、ほとんど不可能である。これらの遺構が一般的に存在すると考えるならば、竪穴住居で出土する出土レベルの高い石製模造品は、それらの遺構からの流入であると考えられる。(3)・(6)の項目がこれに該当する。

(4)の自然廃屋で遺棄した状況を確実に認定することは困難である。可能性としては、岩富漆谷津遺跡の93号・100号住居、馬ノ口遺跡の63号住居が挙げられる。これらの遺構からは、石製模造品が床面近くで比較的多く出土している。伴出遺物として高坏を中心とした土器類が多いことから、住居内祭祀を想定することも可能である。しかし、まつりの状態を保ったまま遺棄したとしては、やや不自然である。馬ノ口遺跡の場合は出土状況からまつりの状態でないことを検証することができた。それでは、まつりの道具を保管している状況とは考えられないだろうか。その裏付けとして、未成品の存在と貯蔵穴内から出土する土器群が挙げられる。未成品が出土したからといっても剥片などは少なく、高坏などの土器類が出土し、遺構の構造も一般

的な住居となんら変わりのないことから、恒常的に石製模造品を製作する専門的な工人のいた工房とは考えにくい。まつりの道具を保管するとともに、石製模造品の小規模な製作遺構⁽²²⁾であった可能性がある。貯蔵穴内で出土する高坏をはじめとする土器類は、まさに保管状況を示しているといえる。遺構の立地が集落の中心から離れて確認されていることから、特別な住居であることは確実である。また、出土状況は、保管の状態を示しているが、大規模な住居である岩富漆谷津遺跡の2軒は、まつりを行う場所を兼ねていた可能性がある。尾井戸遺跡1号住居も遺構の立地からこれに該当するのではないだろうか。

残りは、石製模造品を廃棄した状況(2)・(5)の解釈である。これは現象としては、流入と近い状態で出土することが考えられる。そのため、区別が困難であり、確実に認定できる資料がない。石製模造品という祭具を捨てるという行為が何を示すかの説明も、考古学的に実証することは難しい。そのため、ここでは、この項目は保留にし、明確な出土例の出現を待って説明を行いたい。⁽²³⁾

以上、出土状況の分類に従って説明を行ってきたが、概要で紹介した鴻ノ巣・大森第1遺跡の住居に関してはどれに分類すべきか判断が不可能であった。⁽²⁴⁾

5 おわりに

今回は、時間の関係もあり地域を限定せざるを得なく、やや強引な分析結果になってしまったことをお詫びしたい。今後は更に分析地域を広げ、出土状況の良好な類例の充実を図り、石製模造品を全国的視野のもとに捉えていきたいと考えている。そして、石製模造品を用いたまつりの実態の解明に少しでも近づくように努力していきたい。

- 注1) 下村三四吉 1897「模造副葬品に就きて」『考古学会雑誌』9
- 2) 大野延太郎 1899「石製模造品に就て」『東京人類学会雑誌』15-169
- 3) 八木柴三郎 1902「古墳時代の模造品に就て」『東京人類学会雑誌』17-196
- 4) 高橋健自 1919「古墳発見石製模造器具の研究」帝室博物館
- 5) 亀井正道 1959「信仰から儀礼へ」『世界考古学大系』3 平凡社
 梶山林継 1972「祭と葬の分化—石製模造遺物を中心として—」『国学院大学日本文化研究所紀要』29
- 6) 寺村光晴 1974『下総国の玉作遺跡』雄山閣
- 7) 白石太一郎 1985「神まつりと古墳の祭祀—古墳出土の石製模造品を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』7
- 8) 高橋一夫 1971「石製模造品出土の住居址とその性格」『考古学研究』18-3
- 9) 寺沢知子 1986「祭祀の変化と民衆」『季刊考古学』16
- 10) 第2回東日本埋蔵文化財研究会 1993『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物』
- 11) 篠原裕一 1990「石製模造品観察の一視点—栃木県出土の有孔円板の観察をとおして—」『古代』9
 篠原裕一 1995「白玉研究私論」『研究紀要』3 財団法人栃木県埋蔵文化財センター
 篠原裕一 1997「石製模造品剣形の研究」『祭祀考古学』創刊号
- 12) 加藤正信他 1992『研究紀要』13 財団法人千葉県文化財センター
- 13) 古宮隆信 1980『尾井戸遺跡発掘調査報告書』尾井戸遺跡発掘調査団
- 14) 古内茂他 1974『柏市鴻ノ巣遺跡』財団法人千葉県都市公社
- 15) 高橋健一他 1983『岩富漆谷津・太田宿』佐倉市教育委員会
- 16) 栗本佳弘他 1973「大森第1遺跡」『京葉』財団法人千葉県都市公社
- 17) 加藤正信他 1984「馬ノ口遺跡」『千葉東南部ニュータウン』15
- 18) 大塚昌彦 1988『中筋遺跡第2次発掘調査概要報告書』渋川市教育委員会
- 19) 竪穴住居の廃絶の基本分類として大場磐雄氏、桐生直彦氏の研究から不慮廃屋、自然廃屋の2パターンが想定できる。不慮廃屋は、不慮の災害で人間の意志ではなく廃絶された住居のことで、自然廃屋は、人間の意志により放棄された住居のことである。これには、焼却住居も含まれる。
 大場磐雄 1955『平出』平出遺跡調査会
 桐生直彦 1996「遺物出土状態からみた竪穴住居の廃絶」『すまいの考古学—住居の廃絶をめぐる』資料集 山梨県考古学協会
- 20) 桐生直彦 1987「遺物出土状態の分析に関する覚書」『貝塚』物質文化研究会
 桐生直彦 1987「竪穴住居址を中心とした遺物出土状態の分類について—研究史と整理—」『東国史論』2 群馬考古学研究会
- 21) 桐生氏の分類では、この他に転用があるがここでは、除いている。遺棄は、廃絶時に住居に残されていたもので、廃棄は、廃絶後の住居に捨てられたもの、流入は、住居の近くにあった遺物が入り込んだものを表す。
- 22) 今回住居出土石製模造品の集成を行う際に工房は特殊なため除外したわけだが、報告書に工房の可能性があるが断言できないという記載が多いことが目立つ。つまり、工房にしては、原石や剥片、未成品の出土が少なく、遺構の構造も普通の竪穴住居であるから断定できないのである。これら、未成品を出し工房と断定できない遺構は、中期39軒、後期31軒を数える。
 一般的に、石製模造品の生産・流通は、政治的な部分で論議される傾向が強い。しかし、このような出土状況や出土軒数をみると、石製模造品を用いたまつりの浸透に伴い、ムラの鍛冶屋的な石製模造品製作遺構の出現が想定できると思う。
- 23) 篠原裕一氏は、上記11)文献で住居から出土する位置やレベルによって石製模造品のいろいろな用いられ方の解釈（「習俗的祭祀」・火棚に保管・「投納」）を行っている。しかし、どれと決定するには、考古学的には今の段階では難しい。ほとんどが、流入であると考えるのが、妥当ではないかと考えている。
- 24) このような遺構は、かなりの数存在する。今後検討していきたい。